

創造的な身体表現活動と児童の運動発達

岩岡 研典
西松 原 豊

【目的】

筆者らはこれまで、創造的な身体表現を中心とした運動プログラムの特性と同種のプログラムが発達障害児の粗大運動の発達と動作レパトリーの拡大に関して有する可能性について検討してきた¹⁾。創造的な身体表現活動を中心とした運動プログラムの特性のひとつは、特定の動きや対人行動を要求しない自由度の高い、非定型の運動であることと考えられるが、その特性ゆえ、対象児の動作の変容を定量的に評価することが困難であるという問題点を内包している。

そこで本研究においては、小学校学習指導要領から模倣運動をとりあげて授業プログラムを実施し、運動動作の発達段階を考慮した定量的な指標を用いて評価することによって、創造的な身体表現活動の効果を児童の運動発達の観点から記述・検討することを目的とした。

【方法】

1. 被検者

本研究で対象としたのは、K養護学校（K群）に通学する小学校1、2年生の児童11名とS学園（S群）に通学する小学校2年生の児童9名であった。K群の被検者のうち8名は中等度と診断される脳性麻痺（痙直型）、2名は脳性麻痺（アトローゼ型）、1名は骨形成不全症の障害があった。

2. 運動プログラム

学習指導要領に準拠して、小学校の表現運動の一単位としての模倣運動である「軽くて柔らかい」動きの質に関する3週間の基本プログラムを作成し（表1）、週に1回、40分間の通常授業時に実施した。

表1 授業プログラムの基本的な内容

	第1週	第2週	第3週
目的	特定の質の動き（軽くて柔らかい）を経験する	特定の質の動きから多様なイメージを喚起する	特定のイメージから多様な質の動きを引き出す
内容	軽くて柔らかい動きを引き出す 1)擬態語を使って 2)布を使って 3)音楽を使って	軽くて柔らかいものに化身し、それを表現する	「鳥」を題材としたいくつかの場面からなる物語を創作し、発表しあう

3. 測定項目

3週間の授業プログラム実施前後に以下の項目について測定を行い、比較検討した。

1) 「軽くて柔らかい」質の動きを表現する動作
「軽くて柔らかい」質を表現すると各児童が考える動作を児童毎に行わせた結果を家庭用VTRに収録し、動作に用いた身体部位や動きの多様性について、評価を行った。

2) 「はばたき」動作の発達段階

「軽くて柔らかい」質を表現するひとつの典型的動作として「はばたき」動作を取り上げ、肢位模倣によって発達段階を評価した。舞踊教育経験を積んだ教師が各児童と対面した状態で、最も高次の動作形式と思われる「はばたき」動作を示範し、各児童が肢位模倣する様子を家庭用VTRで撮影し、西²⁾に従って発達段階を分類した。

3) 異なるイメージを表現する際の筋出力

プログラム実施による動作表現の変化が「力性」の変化をともなっているかどうかを検討する試みとして、「軽くて柔らかい」動きをイメージしたときと「大きな鳥がゆっくりとはばたく」動きをイメージしたときの筋出力について測定を行った。測定は、椅座位で肘関節角度を90度に保った姿勢をとり、上記の2種類のイメージで各児童に等尺性肘関節伸展動作を行わせ、掌下部に設置した荷重計を用いて出力された値を記録した。

【結果】

1) 「軽くて柔らかい」質を表現する動作の変化
K群では約半数の児童において、上肢および体幹の上下方向への動作範囲の拡大が観察された。また、S群ではプログラム実施前には9名中6名が立位での表現のみを行っていたが、実施後には全児童とも動きの幅が広がり、ジャンプしたり腹這いになっての表現もみられ、さらに体幹の捻転や側屈なども観察された。

2) 「はばたき」動作の発達段階の変化

「はばたき」動作は手関節および肘関節に屈曲・背屈がみられない直線的な動き（図1中の分類1）から分類5）まで、加齢にもなって段階的に発達する可能性が報告されている²⁾。図1から明らかなように、プログラム実施前の両群の発達段階には若干の差があったが、実施後にはK群、S群とも約2/3の児童において、より高次の段階への移行が認められた。なお、K群の一部の児童

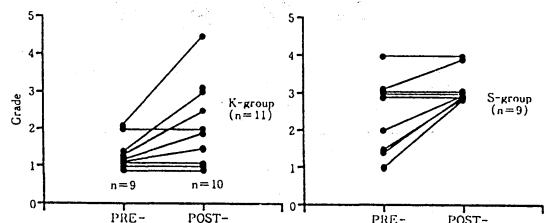


図1 「はばたき」動作の変化

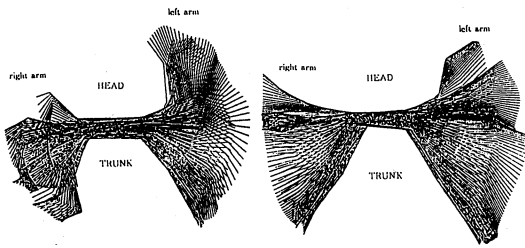


図2 脳性麻痺（アテトーゼ型）の女兒の「はばたき」動作の事前（左）と事後（右）の比較（スティックピクチャーの時間間隔は20msec）

については、障害（脳性麻痺アテトーゼ型）特有の動きにより簡便な分類では判断できなかったため、Ariel社製動作分析器を使用して分析を行った（図2）。図から明らかなように、プログラム実施前（図2左）では左・右腕の動きが協応せず、各腕の手関節および肘関節の動きにも統一性がみられなかったが、実施後（図2右）においては上肢が両側とも協応し、連続性をもってスムーズに動いている様子が窺えた。

3) 異なるイメージを表現する際の筋出力の変化

図3に、「力性」が異なると思われる2種類のイメージで動きを表現したときの筋出力の測定結果を示した。K群ではプログラム実施前の「軽くて柔らかい」（LF）動作表現時の筋出力値が「大きな鳥がゆっくりはばたく」（FB）動作表現時より有意に大きかった（ $p < 0.01$ ）が、実施後の測定値では差が認められなかった。一方、S群ではLF動作表現時の筋出力値にはプログラム実施前後での差はみられなかったが、FB動作表現時の値は実施前に比べて実施後が有意に大きくなった（ $p < 0.05$ ）。

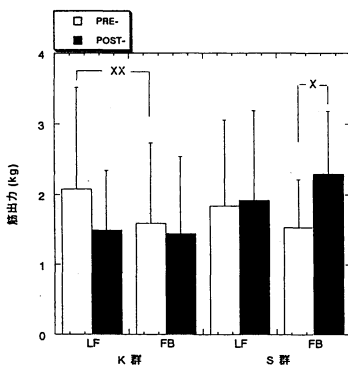


図3 “軽く柔らかく”（LF）と“大きな鳥がゆっくりはばたく”（FB）をイメージしての筋出力値（肘関節伸展時）の事前-事後の比較
X ; $p < 0.05$, XX ; $p < 0.01$

【考察】

- 1) 創造的身体表現活動と児童の表現動作の変容
本研究では3週間の創造的表現活動プログラム

を実施した結果、K群においてもS群においても実施後に表現内容が多様になり、表現に用いる身体各部位の動作範囲に顕著な拡大がみられた。また、動作自体も協応・洗練が進み、「はばたき」動作に代表されるように、より高次の発達段階への移行が認められた。これらの結果は筆者らの過去の研究結果と一致している。

特定の動きや対人行動を要求しない自由度の高い、非定型の運動である創造的な身体表現活動は動作の発達や動作レパトリーの拡大に関して特有の価値を有していると考えられる。創造的な身体表現活動では、個人の障害や発達段階を考慮し、特定の動きを遂行する際にみられるような過度の緊張が生じない環境を形成することによって、問題点を把握したプログラムを作成することが可能である。その特長こそ、創造的な身体表現活動が発達障害児を対象とした教育プログラムで試みられるようになってきている理由であろう。

動作表現の変化は、その動作時の筋出力の変化をとらなうものと考えられる。授業プログラムの実施によってより多様な質の動きを表現するのが可能となったことが、「力性」が異なると想定される2種類のイメージでの筋出力値にどのような影響をおよぼすかについて試みた結果、図3に示したように、K群とS群では異なった変化が得られた。このような差異が何によって生じたのかについては本研究では不明である。しかしながら、このような手法を用いることによって、従来主観的に捉えられてきた身体表現の差を記述する可能性の一端が示されたことは事実であり、データの解釈と同時に、さらに有効な手法の開発を進めることが今後の課題となろう。

なお、本研究で用いた測定手法のうち、前述した測定項目の1)と2)については家庭用VTRの使用によって行うことが十分可能であり、現場で行える評価尺度のひとつとなり得るものと思われる。2) 動作の発達段階に基づいた定量的な尺度による表現運動の評価

本研究では、動作の発達段階を評価するひとつの視点として「はばたき動作」をとりあげ、授業プログラム実施前後での発達段階の変化について検討した。Kiphard⁹⁾らは発達障害児を対象とした研究を通して、身体表現活動を含む多様な運動動作を評価する際の発達の観点的な重要性を指摘している。

本研究では、これまで定性的に傾きがちであった表現運動の評価に、運動・動作の発達の視点を取り入れることを試みた。その結果、学校教育現場で利用できる機材を使用する簡便な方法によって、客観的で定量的な評価が十分行えることが明らかとなった。それが可能となったのは、「はばたき」動作という今回のテーマに合致した表現動

作の発達課程が明らかにされていたからである。動作の発達という観点からこのような指標を用いて児童の変容を評価する試みはきわめて有用であると思われる。

以上の結果から、創造的な身体表現活動プログラムは児童の動作範囲・レパートリーの拡大に有効に作用し、運動発達を促進する可能性を有しているものと思われる。これらの教育的な価値を学校体育の場で十分発揮するためには、創造的な表現活動の基盤となる動作の発達過程を明らかにし、運動発達に基づいた定量的なアプローチによる客観的な評価法を取り入れていくことが重要であろう。

- 1) 岩岡ほか, 体育科学20:17-23, 1992; 21:67-75, 1993; 22:1-8, 1994; 23:43-51, 1995.
- 2) 西 洋子. 舞踊学17:71, 1995.
- 3) Kiphard E. J.: Motopädagogik, Dortmund, verlag modernes lernen, p. 22, 1987.